

社会学において大学生の ICT 機器使用の悪影響を最初に取り上げたのは小片聖である。

パーソナルコンピュータの普及が大学生の学力に悪影響をもたらすことは明白である。パーソナルコンピュータを使用した学習と、紙媒体を使用した学習では、紙媒体を用いて学習した方が、内容をよく理解し、記憶することができる。パーソナルコンピュータの「お手軽さ」のために、学習内容が紙媒体に比べて、利用者に記憶しにくく、また理解しにくいのである。苦勞せずに身につけようとした知識は結局身につかないのだ。一見非効率的に思えようとも安直な策に飛びつかず、拙速に解を求めず、地道に紙媒体で情報を探すこと、それこそが現代の大学生が行うべき勉強法なのだ。 [小片聖, 2001, ページ: 253]

こうした小片の「保守的」な主張は ICT 機器の主流がパソコンから携帯電話、スマートフォンへと移行するにつれ、徐々に大きな声となる。例えば山岸亜佑美は「学生たちはスマートフォンに依存しきってしまい、直接人と語り合ったり、図書館で調べ物をしたり、外国書を手写しにするといった手間をかけた活動をしなくなってしまった。確かに学生生活の効率性は上がった。しかしその質となると甚だ心許ないといわざるを得ない」 [山岸亜佑美, 2014, ページ: 36]と主張する。

また浅倉衣梨奈は「スマートフォンが普及し、教育現場にまで持ち込まれることは想定範囲内であったが、その弊害は多大なものであった。スマートフォン容認派は学生・生徒への不断の指導で対処可能なものと考えていた。しかし現実はそうはならなかった。学生・生徒のスマートフォンを用いたネットアクセスは教員のコントロールの埒外にあるのだ。どのようなサイトにアクセスし、どのような情報を発信するかは教員からは完全に不可視化されている。教員の努力でどうにかなるものではなかったのだ」 [浅倉衣梨奈, 2016, ページ: 29]と教育現場の持つ危機感を説明する。

ここで紹介してきた議論はいずれもミクロな視点からの事例紹介をもとにした議論である。それは確かにスマートフォンの持つ危険性の一側面を明らかにした。しかしその危険性がどの程度の広がりを持つのか、大学生全般にどのように当てはまるのかについてはいまだ不確かなままなのである。これまでの議論の中で欠落しているのはそうした大学生一般の状況を把握するためのマクロな視点からの調査であり、本論文はそれを試みる。

引用文献

山岸亜佑美. (2014). 『教養主義の限界』. OHP 出版.

小片聖. (2001). 『大学生の学力は低下している』. 扇動新聞社.

浅倉衣梨奈. (2016). 「大学生にスマートフォンを持たせてはいけない」. 『情報社会学』
103(2), 24-32.